

多文化共生社会の構築に向けて

佐賀大学 芸術地域デザイン学部 芸術地域デザイン学科 3年工藤依沙

2022年8月から2023年1月の間、リトアニアのヴィタウタス・マグヌス大学で学んだ知識や技能について報告する。私は派遣先大学の芸術学部には交換留学し、主にオーディオビジュアルプロセスやリトアニアの芸術を学ぶ授業を履修した。そこで、ビデオでの表現方法やリトアニアの芸術に関する知識を学ぶとともに、異なる文化背景をもつ人々と協働する力を身につけた。

オーディオビジュアルプロセスという授業では、作り手のメッセージを音と映像で効果的に伝える方法を学んだ。授業は作品を作るうえでの考え方、ビデオの構成、技術的な内容の3つの段階に分かれており、最終的に3人グループで独自テーマの音楽とビデオを作るというものだった。作品を作る上での考え方では、アジアとアメリカの視点の違いを取り上げていた。例えば、アジア圏の人々は物事の全体を捉えるのに対して、アメリカでは限定的な情報を捉える傾向があるという内容だった。ビデオの構成では、ストーリーに変化を持たせることが持つ弊害について学んだ。導入、転換、収束というストーリー構成にすることにより、受け手の捉え方が限定的になって、彼らが自由に想像する余地を奪ってしまう。したがって、今回はストーリー仕立てではないミュージックビデオの制作が求められた。技術面では音の録音方法や動画編集ソフトの使い方などに触れた。

この授業で伝達力を磨くことができた。私たちのグループは“Monotony”(退屈なほど変化に乏しいこと)をテーマにビデオを制作した。まず、各自が“Monotony”だと感じる場面を考えて意見を出し合った後、どのような方法で退屈さを表現すればいいのかという話し合いになった。そのとき、自分の中に思い描くイメージはあるものの、適切な言語表現が見つからず悩んだ。そこで、イラストを描くことで自分の考えを共有し、最終的に自分の意見をメンバーに理解してもらうことができた。この経験から、工夫して相手に自分の意見を伝える伝達力を磨くことができた。

リトアニアの芸術を学ぶ授業では、教会などの建造物、写真、シネマなどを見て、その歴史を知った。特に印象に残っているアーティストは、ミカロユス・チュルリョーニスだ。彼はリトアニア出身の画家・作曲家であり、リトアニアの芸術に大きな影響を与えた。音楽的要素を込めた幻想的な作風で知られており、作品には一見気づかないようなところに楽器や人が隠されている。授業ではカウナスにある国立チュルリョーニス博物館で彼の作品を鑑賞するとともに、生い立ちについても学ぶことができた。

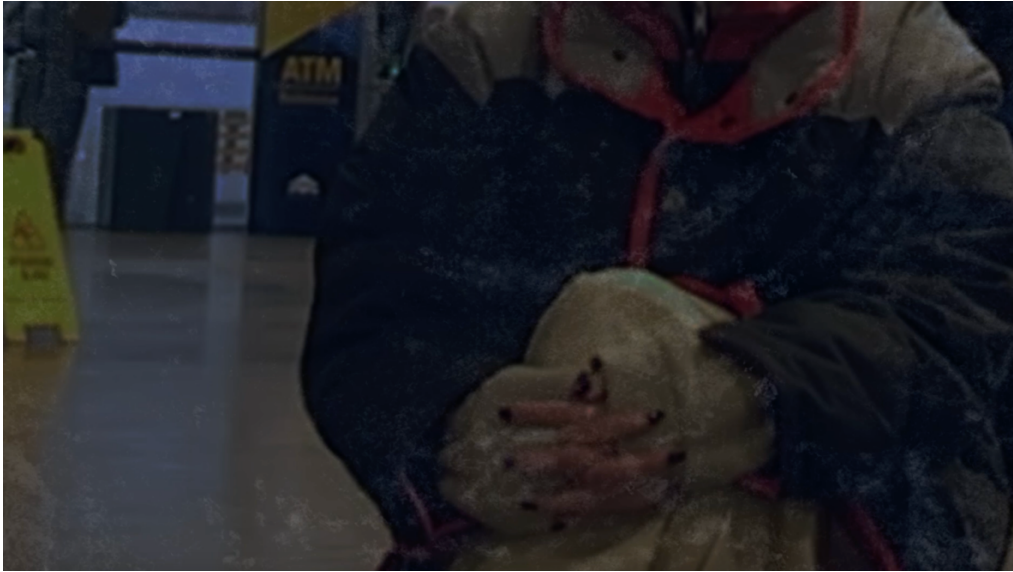
この経験から、過程を知ることの大切さを学んだ。芸術に関して言うと、リトアニアは独自性を重視していると感じ、それは国の歴史と深く関係していると考えた。なぜなら、1990年までの芸術はソ連占領下で行われていたため、芸術家は常に検閲により

表現の自由を制限されていたからだ。独立以降、リトアニアの美術、音楽、映画、演劇は急速に発展した。このことから、文化は歴史と深く関連しているため、その国に住む人々の考え方や価値観をより深く知るために、現在に至る過程をさまざまな角度から知ることが大切だと学んだ。

総務省が作成した「多文化共生の推進に関する研究会報告書～地域における多文化共生の推進に向けて」（2006年）では、多文化共生とは、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義されている。地域社会を作っていくためにはコミュニケーションが欠かせないが、言語や文化の壁によって円滑に意思疎通を取れない場合が考えられる。そこで、授業で磨いた伝達力を活かし、言葉で伝えられない部分をジェスチャーで補ったり、絵を使ってイメージを伝えたりするなど多種多様なコミュニケーション方法をとることが必要だと考えた。

また、芸術の授業を通して、国籍や民族の異なる人々が互いの文化的違いをより深く理解するためには、それぞれの国の歴史や現在に至るまでの文化的、社会的背景を知ることが有効だと考えた。そうすることで、ゴミ出し時の分別問題や各国の電車のマナーの違いなど見落としがちだが外国で生活するためには必要なルールに納得のうえで従うことができる。視点を変えると、伝達力、過程を伝えることは文化を伝える側にとっても重要だ。自国特有の決まりを言語だけでなくイラストで伝えることで、見る人の注意を引くとともに記憶に残りやすくする。また、そのような決まりが存在する理由も伝えることで、理解してもらいやすくなると思う。このように、自分が経験した知識を応用して使うことで、社会生活で発生するコミュニケーションの問題を解決することができると思った。

今回の留学で言語や文化の異なる多様な他者と積極的、主体的に関わったことで、相手を理解するためにその国の文化や歴史を知ることが有効だとわかった。加えて、コミュニケーションを取るうえで言語は重要だが、共通言語がない場合、言語だけに頼らず表情やジェスチャーで考えを伝える気概も必要だと考えた。留学前はより多くの英単語や英語表現を知っていれば、自分の思いを伝えられると考えていた。しかし、多くの人と関わる中で、相手のことを理解したいという思いが最も重要なことだと気づいた。その思いがあれば、言語が伝わらなくても相手の感情を理解しそれに応えることができる。多文化共生社会の構築においても、相手を思いやる気持ちと理解しようとする姿勢が大切だと考えた。



オーディオビジュアルプロセスで制作したビデオの一コマ。身体を撮ることで見る人の想像力を阻害せずに退屈さと不安感を表現するねらいがある。



リトアニア芸術の授業で訪れた国立チュルリョーニス博物館。ミカロユス・チュルリョーニスの絵が展示されていた。右下には“I see the world as a great symphony”とあり、彼が残した言葉が記されている。

(参考文献)

総務省(2006)「多文化共生の推進に関する研究会報告書～地域における多文化共生の推進に向けて」 p5

https://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf (参照 2023-3-19)